説教20210214　エレミヤ17：5-8　ルカ6：17-26　　361　21-90　509

 「今泣いている人々よ」

キリストよお越しください、弟子たちの中に立ち復活のみ姿を顕されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今、泣いている人々よ、、今、泣いている人、多いのではないでしょうか。イエス様は今泣いている人々は幸いである、と私たちに言われました。この御言葉は私たちに何よりの励ましに聞こえることでしょう。今いじめにあって、人知れず泣いている方が、イエス様からこの言葉を聞けば、その言葉によって、あなたは傷を癒され立ち直ることが出来るでしょう。

このようにイエス様のみ言葉には力があります。それは何故かというと、イエス様が神様として、まことの喜びを知っておられる方だからです。私たちが最後の日に入れられる新しいエルサレムでは、もはや死はなく、悲しみも嘆きも労苦もありません。私たちの目の涙はことごとくぬぐい取られ、永遠の喜びとともに私たちはそこに暮らせるようになるのです。新しいエルサレムは夫のために着飾った花嫁のように用意を整えやってくるとあります。

新しいエルサレムはイエス様が最初に栄光を表されたカナの婚礼の場のようなところでありましょう。カナの婚礼の祝宴にあっては、私たちは召使いであり、また世話役であります。祝宴の場にいる者は皆、どのような役割であろうと、一様に一つの喜びに満たされ、果てしなく供される葡萄酒に私たちは酔い、永遠の喜びの内に居ることが出来ることでしょう。そこにはイエス様が知っておられる真の喜びがあるのです。

では、現実的なこの世の喜びとは何でしょうか。それは新しいエルサレムにあるまことの喜びとはちがうものでしょう。私たちは、いくら自分たちの人生の晴れ舞台だと張り切って準備したとしても、カナの婚礼のような祝宴をこの世で催すことはできないでしょう。自分たちの結婚は最高で、みんなを永遠に幸せにする完璧なものにしようなどど力んでいると、ひょっとすると、その時が最高潮で、結婚後はずっと下り坂、という事にもなりかねないでありましょう。私たちのほんとうの喜びは、新しいエルサレムに入れられて永遠の喜びに預かる最後の時まではあり得ない、と思っているほうが私たちはこの世で幸せにいられるかもしれません。

私たちのこの世での喜びとは、まことの喜びに対置させて言い表すならば単なる「喜び」、形容詞なしの喜び、と言い表せるかもしれません。今この世での「喜び」というのは何でしょうか。それは神様から恵まれ与えられこと全てに顕れることでしょう。朝起きれば日の光が恵まれ、路傍の一輪の花が花開いたことに気づかされた時、私たちは「喜び」に満たされることでしょう。ひょっとしたら日々与えられるこのような小さな喜びのほうが、まことの喜びに近いのかもしれません。

私たちはこのような小さな喜びに日々恵まれて、定められたこの地での生涯を終えるとき、新しいエルサレムにおけるまことの喜びの形を悟る者へと変えられていることでありましょう。

さて今日はこの別府不老町教会の創立１１０周年を記念する礼拝としてお捧げしています。主なる神が、この教会を祝福し守り続けられました幸いに感謝します。これからもますますここで主の栄光が表されますように、私たちは祈り働いていきたいと願います。１１０年という年月を思いますと、私は今年度の年度目標「わたしが命じるすべてのおきてといましめを守って長く生きる」という事に思い至りました。これからは人生100年時代などと言われて、平均寿命も長くなってきましたので、人生１１０年を目標に生きる人もおありになるでことしょう。でもこの「わたしが命じるすべてのおきてといましめを守って長く生きる」というのは単に長く生きるというのではなく、この世的に言えば「健康長寿」という考えに近いことです。「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです。」と詩篇に歌われておりますが、教会でのひと時は千年にもまさるという事です。これ以上の健康長寿があるでしょうか。このように、また教会の刻む年月というのもこの世の尺度では図り切れないことであります。私たちはこの１１０周年という年月を記念するにあたり、そこに与えられた果てしない主なる神からのお恵みに、限りなく感謝と賛美をお捧げいたしましょう。

　さて聖書に戻りますと、今日の新約の聖書箇所はマタイ福音書では山上の説教としてよく知られています。確かにイエス様は山に登られて弟子たちにこれらのことを教えられたとマタイ福音書には書いてあります。では、今日のルカ福音書の箇所ではどうかと言いますと、イエス様がどこでこれらを教えられたかについては明記されていません。ただ、「さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた」と記されているだけです。それまで、イエス様は大勢の弟子たちと民衆たちに対して平らなところで、癒しの業を行って、彼らを喜ばせていたのでした。しかし、今やイエス様は、その場を離れられたのでありましょう。そして一息ついて、目を上げ弟子たちだけに語られたのです。イエスの心は高いところに向けられています。天に居る父なる神に向けられているのです。これから弟子たちに語ることは単なるこの世の「喜び」ではなく、天にある真の喜びに関わることであることを、場を改めて悟らせるためであったかもしれません。

「貧しい人々は、幸いである、／神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、／あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、／あなたがたは笑うようになる。」というみ言葉を聞くとき私たちは癒され元気を取り戻すことでしょう。神の恵みは至る所にあります、今この場で息をして、御言葉を頂くことも何という恵みでありましょうか、恵みというのはこのように与えられ、私たちがそれを素直に受け入れるとき、そこに喜びがあるのです。今、貧しいとか、飢えているとか、泣いているというのは関係がないことなのです。

さてここまでの話は、イエス様がおびただしい群衆たちから離れて距離を置かなくても、語れたことですが、次に出てくるみ言葉はちょっとそうはいかないように思えます。ではそのみ言葉を聞いてまいりましょう。

「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、／あなたがたはもう慰めを受けている。

今満腹している人々、あなたがたは、不幸である、／あなたがたは飢えるようになる。今笑っている人々は、不幸である、／あなたがたは悲しみ泣くようになる。」

如何でしょうか、もしこの御言葉を群衆たちが耳にしたなら、彼らは故郷の人のようにイエス様に殴り掛かったかもしれません。少なくとも、今イエス様から良いことをしてもらって喜んでいる人々にとってこれらのみ言葉は決して聞きたくはない言葉ではなかったでしょうか。

この世における形容詞なしの「喜び」のことを考えますと、イエスがその喜びの両面をこのようにはっきりと教えられたことは、又聞くもののを益することであるでしょう。まことの喜びではない、この世の喜び、それはやってきたと思えば、過ぎ去っていき、またやってきたかと思えば、また過ぎ去っていくといったたぐいの事です。それは先ほども申し上げた通りその一つ一つは小さな喜びです。永遠に続く喜びではありません。しかしそのようにはかなく小さな喜び一つ一つだからこそ、私たちはそれを抱きしめ大切にして育んでいくのではないでしょうか。イエス様は群衆たちから距離を置き、先ず心ある弟子たちにだけこのことを伝えられました。

私たちも今、この世の群衆たちから離れこの会堂において、イエス様の弟子としてみ言葉に耳を傾けています。イエス様の弟子であるか群衆であるかの線引きは、私たち人間ができることではありませんが、少なくとも今ここでみ言葉聞いている私たちは全てイエス様の弟子であります。どうかこの弟子たちがイエス様に最後までついていくことが出来ますようにと祈り願っています。

さて、今日読まれました旧約聖書の箇所には「主はこう言われる。呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとし／その心が主を離れ去っている人は。」と記されています。ここには人間の頼りなさがはっきりと記されています。ヒューマニズムが手放しでほめたたえられる今の世の中で、こんな風に明言しますと石を投げつけられそうですが、どうかこのことが信じられますように。そしてこのことを信じた時あなたは「祝福されよ、主に信頼する人は。主がその人のよりどころとなられる。彼は水のほとりに植えられた木。水路のほとりに根を張り／暑さが襲うのを見ることなく／その葉は青々としている。干ばつの年にも憂いがなく／実を結ぶことをやめない。」と記されている通りの姿へと変えられていくことでしょう。

イエス様は人の耳に痛いこと、聞きたくないこともはっきりと明言されていきます。新約の聖書箇所の２２節に「人々に憎まれるとき、」そして２６節には「すべての人にほめられるとき」とありますが、ここで語られる人々、全ての人というのは人間、と訳したほうがわかりやすいと思います。「人間に憎まれるとき、」「人間にほめられるとき」ということです。「人間」というのは神と人間と区分した時の人間の事です。エレミヤ書が語る人間の事であります。イエス様が私たちに対して「人間よ」と言って名指しされるとき、どんなに立派な人も又どんな悪い人も、そこに含まれています。私だけはそこには当てはまらないだろうと思ってみても、それは思い込みにすぎません。つまり私たちは一人残らず時に「人々を憎み」、又時に「人をほめる」者であることをイエス様は言い当てているのです。イエス様は、人間が時に人々を憎み、時に人をほめるという事についてどうこう言ってはおられません。が、そうされたときのことを厳しく教えておられます。ではどのようにイエス様は教えられているのでしょう。それは、あなた方は人々に憎まれるときに喜び、人々にほめられるときに悲しめ、という事です。このイエス様の教えは一見、それは逆でしょうと言いたくなるような、すぐには受け入れられらないような御言葉です。私たちはこれどのように受け入れれば様でしょう。

私たちはここで、この世の喜びというものが、日々与えられる小さな喜びの連続であることに思いを致したらよいのかもしれません。朝に日の光を恵まれ、路傍の一輪の花の美しさに恵まれるとき、私たちはまことの喜びに満たされることがわかってくることでしょう。

逆に自分も含めた人間の行いの恵みのなさに気づかされることでしょう。イエス様はそのことを旧約時代の預言者が迫害されたこと、そして偽の預言者がかえってほめたたえられたことに触れて戒めておられます。まことの預言者イエス様はこのようにまことの喜びにつながる、この世の一つ一つの小さな喜びの満たしを、み言葉によってかなえて下さる方です。私たちもそのイエス様の弟子となってその恵みの御言葉を世に語り広めてまいりましょう。

お祈りいたします

天に居ます私たちの父

あなたは御子を通して、あなたの真の喜びを教えてくださいました。どうか私たちがこの世の歩みにおいて恵まれる一つ一つの喜びを大切にしてそれを育み、まことの永遠の喜びへと近づいていかれるようにしてください。

今日は私たちの兄弟姉妹である永見てるよ姉の昇天を記念する、前夜式が執り行われます。姉妹が安らかに身元に召されました幸いを覚えつつ、永遠の喜びの御国へと共に歩んでいけますよう、聖霊の導きを祈り求めます。

また、今日お目にかかる姉妹のご親族一人一人にもあなたの計り知れない恵みが証されていくことが出来ますように。

昨晩、東北地方で発生した大地震により、多くの方々が苦難と不安のうちにおられます。この世にあって涙を流す方々のみそばにあってあなたの御言葉が、絶えず、喜びと平和の源として恵まれていきますように。

私たちが涙をことごとくぬぐってくださる、あなたの御業を信じ、いつわりの喜びにおちいることなく、まことの永遠の喜びの御国への道を歩まされますように、日々の祝福を待ち望みます。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されておられます